

透明な秋

桜井千恵子 宮城

失くしたる思ひ出ばかり呼び出して だから透明な秋つてキライ
黄の蝶が黄の蝶を追ふ秋の野に対を造りし神笑みたまふ
むらさきは昔むかしの恋の色紫式部の珠実つやめく
どの色がしあはせ呼ぶと思はねど来年は緋の手帳を選ぶ
わたくしを眠らせるため雪白ゆきしろの錠剤ひとつ手のひらに載す

聖痕

尾崎玲 福島

白鳥を待ちある蛭田川びんたがはぞひに咲きつぐ枸杞のあはきむらさき
「八月の石にすがりて」声ひくく口ずさみぬし少年いづこ
町にいまだ原発なきころ聖痕シユテイケンといふ語を知りきマルテの手記に
おもむろに濃霧こきりの底よりうかびくる「マルテの手記」の約百ヨブ記三十章
木草ふく風ぬらす雨ひもすがらやさしい音につつまれてゐた

なぜ楕円形

神保外子 埼玉

ペランダの野葡萄の実の熟れぐあひ今朝もひよどり確認してる
反則はスローフォワード、ノックオンしか知らねどもラグビー楽し
ラグビーのボールなぜなぜ楕円形十日の月は知らぬと言へり
平成を一年余りしか知らぬ夫に令和の命日がくる
針持つは久しぶりなりスカートスカートの裾のほつれを直して足らふ

大きな眠り

齋藤美衣 神奈川

ありがたいものばかりなるこの世にて小さな居場所見つからぬ夜
なんといふ大きな眠り世界中わたしをおいて眠つてしまつた
きみはまだほんたうのあいをしらないといふ人がゐて静かな雑踏
いやなことはやめればいいといふ人の袖口すこし黄ばんでをりぬ
骨組を確かめてゐるうつし身のからだを人と重ねるときは

トレンチ姿と横顔

能勢玉枝 東京

玄関に靴をそろへてあがるときこの家の人へ心もそろふ
「どうぞ寝てゐてくださいね」病む人へけふは対面朗読する日
この秋の賜物ならむ手を取りてはじめましてと言ふ出会ひあり
とことはの存在感なり寺山のトレンチ姿、子規の横顔
ゆきずりの鏡のなかにわれに似るさびしん坊の案山子が立てり

クレーンの爪

黒石孝 新潟

廃業の数とどめなく策もなく会議の窓を初霰打つ
向かひ席に座る七人内六人スマホ繰りつつ一人爆睡
ビルの上に立つクレーンが爪を研ぐ大東京の冬澄みわたり
洪水の跡どすぐろき信州の露店に齧るリング「名月」
あと一本煙草吸ひたく起きてゐる夜更けの窓に守宮貼りつく

山栗あらず

今村 日出子*長野

カラス飛び屋根に陽は差す 泥水に浸かってなければいつもの朝だ
畑すみの萘こそすごき野菜なり採っても採っても青々生える
寝坊して山栗あらず栗拾いたる人とすれ違うも悔し
クリスマスツリーがボンと立ち上がる絵本来たりぬ冬の封書に
国道にこぼれる灯り休息は許されぬらし真夜のコンビニ

透明な光

稲垣 草歩*静岡

山の端をはぐれ蝙蝠過ぎにけり台風十号迫り来る夜
パチンコ屋はコンビニとなり塾となり空き地となり我五十二となる
秋の雲が空いっぱい夕ぐれに蟬が死んでる俺は生きてる
透明な光が積もる草の上 からすあげはの命消えゆく
俺は何をやりたいのだろうとわからずに検索をする夕闇の中

遠くなりゆく

新屋 修一 兵庫

思ふまま生きてゆくとの選択肢えらべぬままに老齢ちかし
年ごとに遠くなりゆく足の爪切らざるままに幾日を経つ
給料をもらひし日々を思ひつつ年金おろす列へとならぶ
もう今日はがんばらなくていいのよとジムノペデイの一番がいふ
三輻は車庫の外にてそのほかは中にあるまま動かぬ電車

蟻はなにかを

藤岡成子 兵庫

風、ひかり、雲に国境はないからに大手をふりて黄砂飛び来る
頑張れど叶はぬことあり懸命に蟻はなにかを運んでゐるが
吾夫はや十歳違ひのおとうとになつてしまつた 私は老けた
助手席にをれどときどき右足がブレーキを踏む孫の初乗り
ああ今日は考の誕生日 鯛焼きの焼けるにほひに思ひ出したり

遙かな記憶

小沢 まき*広島

一段ずつ回り階段下りながら思う削られゆく鉛筆を
太陽が滲む空から風は吹き遠吠えという遙かな記憶
感情に名前を探し極まれれば夕焼け雲のひとつおうごん
もう何も守らなくていい安らぎに開いたままの二枚貝の死
手で挟むブラック無糖 逃げるにも体力はある 帰るならなお

朝食はオムレツ

浅野千里 香川

木と弦と馬のしつぽで美しき調べ生むなりバイオリンといふは
つややかな音色は稔り秋に聴く古沢巖のパスサカリアよ
シャンソンの「枯葉」を聞けばフランスのことは空より降り来ることし
空見ても大地を見ても愉しいか毬栗大き口ひらきたり
朝食はオムレツにせん雨あとの雲より黄きの半月のぞく